

「シンポジウム『春琴—谷崎文学と舞台芸術の国際共同制作をめぐる』」事業

日本発の現代演劇の国際共同作品『春琴』のアメリカ公演を機に
舞台芸術における国際交流の意義を検証する

言葉の問題などもあり海外で日本の現代劇が上演される機会は少ない。そんななか、谷崎潤一郎の作品を題材に、英国人演出家と日本の出演者、スタッフが共同で創り上げた舞台『春琴』が、待望のアメリカ公演を果たした。本シンポジウムは、公演に合わせて、『春琴』上演の意義を検証し、作品への理解を深めてもらうための機会として企画された。

アメリカにおける日本研究の拠点のひとつ
ミシガン大学日本研究センターの協力のもとに開催

世田谷パブリックシアターとイギリスのコンプリシテとの共同制作により、鬼才サイモン・マクバーニー演出、深津絵里ら日本人俳優が出演して2008年に初演された『春琴』。谷崎潤一郎の小説『春琴抄』と随筆『陰翳礼讃』をモチーフにして、陰影に富んだ照明や三味線の音色などを用いた観客の五感を刺激する演出で高い評価を得た。海外でもこれまでロンドン、パリ、台北で上演され成功を取ってきたこの舞台が、今年、ニューヨーク最大の舞台芸術の祭典リンカーンセンター・フェスティバルに正式招待され、待望のニューヨーク上演を果たし、次いでミシガン州アナバー、ロサンゼルスで公演を行った。

シンポジウムは、アメリカ公演に合わせて、アメリカを本拠地として日米の舞台芸術の交流を促進する活動を行っている「日米カルチュラル・トレード・ネットワーク（CTN）」が主催したもので、9月19日にミシガン大学の



シンポジウムには100人近くが集まった

図書館ホールで行われた。CTNの役員で国際演劇協会日本センターの事務局長を務める曾田修司さんは、開催の経緯を次のように話す。

「日本の優れた現代劇をアメリカに紹介する絶好の機会ということで、当初は、集客が期待でき影響力の大きいニューヨークで行う予定でした。しかし結果として、アメリカにおける日本研究の拠点のひとつであるミシガン大学の日本研究センターの協力のもとで実施できたことで、今回のシンポジウム開催はより意味のあるものになったと思います」

シンポジウムではミシガン大学日本研究センターの所長が司会を務め、ゲストスピーカーとして、やはり日本研究が盛んなハワイ大学、カナダのビクトリア大学の教授でいずれも日本文学の研究者たち、さらに『春琴』に出演した俳優の笈田ヨシさんが出席した。当日は、日本研究センターで学んでいる人たちを中心に100人近くが参加し、大いに議論が深まったという。



語り手と佐助の役を演じた笈田ヨシさんも参加した



熱心に耳を傾ける参加者たち



シンポジウムを告知するチラシ

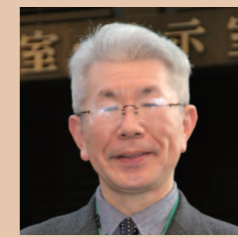
オリエンタリズムを超えて評価される
国際共同作品『春琴』

「谷崎文学が演劇という視点から解釈される機会は初めてなのでは。国際共同制作の舞台で、日本の文化が現代演劇としてどのように造形されているのかよく理解できました」と曾田さん。

サイモン・マクバーニーは前衛的な舞台作りをする演出家として知られるが、『春琴』でも二重三重の仕掛けが施され極めて現代的なアプローチで谷崎の世界が創り出されている。たとえば見どころのひとつでもある、少女時代の春琴を文楽を思わせる人形を操ることで表現し、成長するにつれて俳優に入れ替わるという演出。佐助は少年期から老年まで別の俳優が演じつつ、お互いが時空を超えて同じ空間で干渉し合うという入れ子の構造になっている。また、劇中で語り手が『春琴抄』を朗読し、その語りの構造が立体的に舞台上に展開されるのだ。このような重層的に繰り返される演出手法が解き明かされると、すでに舞台を観ていた参加者からも「舞台を通して谷崎文学の複雑さがよくわかった。そのうえでもう一度舞台を観たい」という声が上がった。

「『春琴』という作品が単に西洋と日本文化の出会いというだけでなく、いろんな要素が入っている優れた現代演劇として議論が深められたことは大きな成果でした。オリエンタリズムへの興味を超えて作品への理解を深めてもらうよい機会になったと思います。同時に、私たち日本人には当たり前で意識しにくい日本の部分を、外から日本を研究している人たちの視点から改めて教えられた1日

担当者より



ご支援のおかげで
アメリカで開催することが
できました。

日米カルチュラル・
トレード・ネットワーク（CTN）
役員
曾田修司さん

AJOSCの助成がなければ海外での開催は実現できませんでした。活動としては、公演にいたる過程をドキュメンタリーとして記録できればよかったのですが、それは今後の課題とします。文化活動は継続して行うことで成果が現れてくることが多いので、長期のご支援を続けていただくと大変ありがたいです。

にもなりました」と、曾田さんはシンポジウムを振り返る。曾田さんは、今回の試みの意義を2つあげる。ひとつは、日本研究の土壌のあるミシガン大学で行ったこと。もうひとつは、シンポジウム単独ではなく上演と連携して実施できたこと。言葉の問題などがあり海外では成功例の少ない日本の現代演劇を、上演とは違った形で伝えるよい実験になったという。今後、海外に日本の演劇を紹介していくうえでの大きな成果となった。そのためにも、国際共同制作の優れた現代演劇作品である『春琴』は最高の素材だったといえるだろう。



『春琴』アメリカ公演のパンフレット